

滿洲國經濟視察雜觀

目次

一	序言	一
二	東歐新興國と滿洲國との比較	三
三	滿洲國の眞價値	四
四	滿洲國の開發と日本移民	七
五	滿洲國の開發と支那移民	九
六	支那移民に関するデレンマ	三
七	日本移民の適應性	四
八	對滿投資と貿易との關係	七
九	日滿産業統制の必要	九
十	滿洲企業と領事裁判權	三
十一	日滿特惠關稅問題	三
十二	日滿特惠關稅の實行方法	六
十三	機會均等待遇の起元	六

十四	機會均等待遇の發達	三
十五	滿洲國と機會均等待遇	三三
十六	機會均等と滿支關係	三三
十七	滿洲國通貨問題	三六
十八	日滿通商條約締結問題	三六
附 表		
第一表	滿洲國對外貿易表	四〇
第二表	滿洲國主要品輸出額表	四〇
第三表	滿洲國主要品輸入額表	四〇
第四表	滿洲國輸入額國別割合表	四一
第五表	滿洲國輸出額國別割合表	四一
第六表	滿洲國輸出入額國別割合表	四一
第七表	滿洲國中央銀行及朝鮮銀行紙幣發行高比較表	四一
第八表	滿洲國幣對邦貨、圓對銀元及圓對金法爲替相場比較表	四一
第九表	本邦統計ニヨル對滿洲國、關東州、中華民國及香港輸入額比較表	四一
第十表	本邦統計ニヨル對滿洲國、關東州、中華民國及香港輸出額比較表	四一
第十一表	本邦統計ニヨル對滿洲國、關東州、中華民國及香港輸出入額比較表	四一

滿洲國經濟視察雜觀

特命全權公使 川 島 信 太 郎

一 序 言

本日は御多忙の所、斯く多數御出で下さいました上に、滿洲及び支那問題に付て、特に造詣深くあらせらるゝ方々の御列席下されたと云ふ事は、私として非常に光榮と存する次第であります。諸君に對しまして私の話すことは實のところお氣の毒な結果に終るであらう事を虞れる者であります。今御紹介を戴きました通り去る十月上旬から滿洲及び北支方面を旅行致し、努めて色々の人に會つて色々の御話を承つて歸つて來たのであります。併しながら只今から申上げる事は總て多數の人に依り種々の方面に於て論議せられて居る所でありまして、別に新しい事はないかも知れないと思ひます。唯私は役人の側も民間の方面にも多數の人に努めて御目に掛つて來ましたので、種々の問題に對しまして、其の楯の兩面とも申す具合に異つた兩方面の意見を承りましたから、此兩者の意見を御紹介致し、時に差支ないと思ふ範圍に於て卓見を附け加へたいと思ひます。

旅程から申しますと、先づ朝鮮方面から陸路北進、一寸京城に立寄り後安東方面に参りました。それより大連に出で、其處で色々の基礎的調査とでも申すやうなことに數日を費やし、それから鞍山、撫順、奉天經由新京に参り、次いで新京を中心として、南は公主嶺より東は吉林、敦化、間島、雄基、羅津、清津等の間を往復致しました。更らに新京より北進して哈爾濱及び齊々哈爾へ参り、齊々哈爾よりは内蒙古の砂原を窺ふ爲め、松岡君御自慢の洮昂線を採つて奉天へ歸りました。奉天からは錦州、熱河、山海關、北京、天津、青島、上海と廻つて、上海から船で十一月中旬歸つたのであります。此の如き短期間の方々視察し得たことは、南滿洲鐵道會社の經營による交通網が非常に發達するに至りしことと、飛脚旅行と申しますよりも、寧ろ飛航旅行とでも申し得べき様、軍部の御厄介にもなつて新京、圖們間、哈爾濱、齊々哈爾間、奉天、錦州、熱河間等は飛航機によつたからであります。従つて其の觀察も所謂鳥瞰圖に過ぎぬことと思ひます。

一 新興國と滿洲國との比較

併て大體論と致しまして日本人の滿洲に對する觀察には兩極端があると思ふ。即ち滿洲を非常によく思つて居る人——それは多少宣傳的の意味を以て、特に樂觀論を唱へる人もありませうが、反對に滿洲國に對して、非常に悲觀論を唱へる人もある様に思はれます。例へば滿洲國の建設により、國際上に於ける日本の産業的孤立の地位が救濟せらるゝに至ると云ふやうな樂觀的意見と、滿洲國は未來

永劫日本の財政上に大負擔を齎らすべきものと爲す悲觀論もあります。併し自分の見るところによりますと、成る程滿洲と云ふものは日本本土のやうな、又カルフォルニア、濠洲、ニュー・ジージーランドのやうな天然に恵まれた土地ではない。天然の富源と云ふ點から見ても、或は氣候と云ふ點から見ても、日本人の移住の爲めには、或は朝鮮、北海道よりも劣つて居るかも知れんと思はれます。併しながら此の滿洲と云ふ土地を一般的に世界に存在する諸獨立國と比較すると、一般日本人は實價以下に見て居りはしないかと思はれるのであります。

殊に私はバルカン方面、中央アジア方面、ロシア方面などを能く旅行しました關係上、滿洲旅行中感ぜらるゝことは、是等方面に於ける新興諸國と、目前に映ずる滿洲國との比較であります。領土の大きさから申しますと、滿洲國はフランス及びドイツに、更にスイツル、及びオーストリアを合したものに匹敵すと、バーンビー卿の報告中にも現はれて居ります。併し是等の諸國と滿洲國とを比較することは天然富源及び氣候の點に於て、如何に眞面目に見ても滿洲國の方が貧弱の様に思はれます。併し之れを東歐又はバルカンに移して比較致しますと、其の氣候、富源、更らに進んで一般民度に於てすら彷彿たるものがある。又其の領土の大きさから申しますと、新興滿洲國は希臘、アルバニア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア即ちバルカン全體と更らにポーランドとを合した位である。即ち滿洲國の領土を歐羅巴に移して見るとポーランドの様に既に聯盟の常任理事國の地位を

すら狙ふ大國や、ユーゴスラヴィアの如き、其の國境を汽車で横切るに二十四時間以上かかる大國を譯もなく包含し得る勘定である。序ながら歐羅巴ではロシアとユーゴとを除けば、其の國境を横ぎるに、二十四時間も掛かる大國はないのである。而して南滿洲の山河の状態は、此のユーゴスラヴィアや希臘等に非常に能く似て居ると思ひます。鐵路過ぐる所多くは、山に樹木少なく、丘陵多く起伏するも、他方に於て泥河の流るゝ兩側には相當の平原あり、土塀を圍らせる民屋が是等丘陵平原の間に點在する状景は最もユーゴの夫れを思ひ出さるゝのであります。滿洲の土民は非常に貧乏だと思はれて居りますが、希臘、アルバニア、ユーゴスラヴィア邊りの百姓と比較して、大した違はないと思はれます。尤も希臘の首府、アテネや、ユーゴスラヴィアの首府ベルグラードを、滿洲國の新京、或は奉天と比較して見ますと、豪壯なる城郭の邊りは奉天等の方優らんも、文化施設其の他都市の美觀は彼の方が一段優つて居ると思はれます。ベルグラードと云ふ町は戦前はセルビアと云ふ小さな國の首府で、人口も僅に十何萬人に過ぎなかつたが、大戦後はモンテネグロ及び奥匈國より分離したクオアート、ダルマチア等を併合し、ユーゴスラヴィアと云ふ大國の首府となつたから、俄に人口四五十萬人の新式の大都會になつてしまつた。アテネも戦後は小亞細亞よりの歸還民をも收容し、戦前二十萬人を充だざりしものが、今日はピレウス港を併せ八十萬人の大都會となつた。

三 滿洲國の眞價値

之に反して北滿の方はルーマニアや、ポーランドによく似て居ります。一望遮るなき渺々たる平原の續くところ、何と云ふても歐洲の穀倉と云はるゝ兩國や白露あたりの状景であります。只北滿は未だルーマニアやポーランドの如く開けて居らず、又耕作物も小麦にあらず、大豆でありますから民度は稍兩國より低く、人口も一層稀薄のことと思はれます。さて以上バルカン諸邦とポーランドとの人口を合計して見ますと約七千七百萬人となりますが、これを現滿洲國の全人口三千四百萬人に比すると、滿洲國に於てはバルカン及び東歐程度丈けでも今後發達し得ば、現在の人口は倍額となり、其の首都たる新京は前記ベルグラード、アテネの繁榮は勿論のこと、人口百十七萬と稱せらるるポーランド首府ワルソワを凌駕するも近々の事と思はれます。滿洲國の氣候なども一般日本人の間からは非常に酷烈のやうに云はれて居りますが、之れは日本人の様な南方人種の生活を爲す國民から云ふことで、バルカンや北歐の國民から見れば、イヤ是等北歐國民の様な衣食住をするならば、北滿と云へども大して住みにくひ所とは思れない。尤も滿洲國は同緯度の歐米諸國に比し、寒氣は一層嚴しいところもあらうが、冬季中快晴の天氣が續くから凌ぎ易いと思ふ。之れを北歐に於ける冬季は常に曇天勝ちで、北獨方面ですら、一箇年六箇月位は太陽が見へないやうなところに比し、滿洲國は大に住み易いと思ふ。之れはフィンランドのヘルシングフォルスに永く勤務した經驗のある同僚にして、同時に最近迄新京に勤務して居た人に質問した結果に徴しても明白であつた。殊に滿洲は東方一帯を横ぎる長白山

脈に遮られ、冬季に於ける氣候が緩和せらるゝのであります。現に寒流に洗はるゝ沿海州又は北鮮一帯と滿洲國內部とは氣候上、格段の差異がある様に思はれます。結極滿洲國の氣候はバルカンなり、ポーランドなりに比較致しまして大差なく、さも酷い様に云ふのは日本のやうな快適な氣候に住んで居る所から見な觀察であると思はれる。世界的に見るならば、滿洲國の氣候は餘り苦情を言ふべきでないと思ふ。斯ふ云ふ様に滿洲國の眞價を世界的に觀察致しますると、滿洲國と云ふものは聯盟理事會の一員たる資格ある程の大國が、二つも其の中に包含せらるゝ程の内容を包藏して居ると言ひ得るのである。

さう云ふ譯でリットン調査團でも、バーンビー卿の視察團でも、滿洲に来て案外滿洲の文化が相當の程度に發達して居るのには驚いた事だらうと思ひます。例へば現在の民度を以てしてもバルカン方面と比較致しまして、大して差異はないのであります。併も其の過去の發達振りから見ますと實に驚くべきものがありまして、到底バルカン等と比較すべきではありません。此の事は世界一般の人々は勿論、日本人でさへも案外注意しないことでもあります。過去十年二十年の間に於て滿洲國ほど急激なる經濟上の發展をなした國は世界中何處にもないのであります。世界の諸國中經濟發達最も急激なるところとして常に擧げられるゝのは、カナダ、米國、日本、シンガポール、濠洲、ニュージールランド等であるが、之等何れの國と雖へども、滿洲に於ける人口の増加、鐵道の發達、産業貿易の増進等

には比肩出来ないのである。毎年百萬人の外來移民を吸收し、人口が四半世紀間に二倍となつた國が世界の何處にあるか。又歐洲大戰前、即ち今より二十年前に比し、最近に於ける歐米諸國の金貨換算貿易實額は約半額に減少して居るが、之に反し滿洲國は實に其の三割増を示して居る。日本は二割五分増。尙滿洲國の外國貿易額は銀貨計算によれば、大正二年に於ける輸出入額二億三千九百萬圓に對し、昭和八年に於ては九億六千三百百萬圓の巨額に達す。更に世界經濟界は昭和四年以來空前の不況を極め、昨年の貿易額は約三分の一に減少して居るが、滿洲國に於ては同年以降と雖ども銀貨本位採用の爲めもあり、甚だしき惡影響を受けて居ない。然るに是迄世界の人々は、滿洲國をアジアの片隅にある野蠻國と思つて居た。それが抑々國際聯盟に於て認識の誤解を來たした所以である。

四 滿洲國の開發と日本移民

斯う云ふ様に滿洲國は經濟的に見て將來發展性ある大きな國——ヨーロッパに於てならば、大國二つにも相當する程の大なる領土を有するのでありまして、之れを開發する責任は日本人が負ふことになつたのであるから、今日世界に類例なき人口増殖力とヴァイタリチーを有する日本人の將來に對し、活動の範圍が餘程増加したものと云はねばなりません。

さうなると直ちに起きて來る問題は、日本より滿洲に移民を送り得るやの問題であります。廣い意味に於ける滿洲への日本の移民問題、即ち單に日本労働者の移住と云はず、在らゆる職業の日本人が